
夜の祭りと赤い月

ヘルメス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の祭りと赤い月

【Nコード】

N3529A

【作者名】

ヘルメス

【あらすじ】

国王がご逝去なされた。国中から鮮やかな色彩は取り払われたが、宮廷は赤で飾られていた。死のゲームの存在。ターミルはこっそりと家を抜け出し、ある祭りへ迷い込んだ。そこで出会った美女。その祭りへ赤い月が出る時まで続くという。毎夜その美女へ会いに祭りへ赴くターミルと日々赤で彩られていく宮廷。彼の人生はただは赤へ向かうのみ。

第一章 酔夢

第一章 酔夢

“国王がご逝去なされた”

すぐに知らせは国中に駆け巡り、国を挙げて喪に服することになった。華やかな祭りは中止され、通りを飾る鮮やかな色彩は取り払われた。

対して、宮廷では鮮やかな赤が目につくこととなった。以前から行われていた死のゲームがその激しさを増していったのだ。

ターミルは家を抜け出してきたところだった。寂々とした夜の中、ふらふらと一人で散歩をしていた。こんな夜の一人歩きは危険なものである。すぐそこで盗人が待ち構えているかもしれない。どこに彼の命を狙う者がいるかもわからない。だが、彼はぼろに身を包んでいた。これなら少しは危険が減るだろうと考えたのだ。誰もこんなぼろを着た人間が盗む価値のあるものを持っているなんて考えるはずがない。

彼は気の向くままに道を折れ曲がり、下り、上っていった。家の窓から町を眺めることはよくあったが、町に出ることは少なかった。だから、町の地理には明るくない。それどころか、町を一人きりで歩いたこともなかった。それ故、ただ足が向く道へ歩いていくしかなかった。それでも、彼にはちゃんと家に帰れる自身があった。どこからでも彼の家は見えるのだ。

彼は、好奇心で、駆け引きの声上がる市場に入った。また、冒険心で、暗く人気のない裏路地へも入った。そして今、彼は家もまばらな道を森に沿って歩いていた。さすがに森に入るのは躊躇われた。それに森の奥からは一筋の煙が上がっている。火事だろうか。だが、彼の耳には届いたのだった。笛の細い音。いや、乙女の歌声。

いや、震動する太鼓の音。いや違う、雑多な人の話し声。木々の間から漏れる音は、しかしそれら全てを含んでいるようだった。

祭りなどあるはずがないのだが、と彼は心の中で囁いた。

森の調べに誘われて、彼は恐れも知らずその中へ足を踏み入れた。

森の調べがターミルを導いていく。調べが彼に行き先を教え、彼は足を止めなくてもすんだ。しばらく調べを追っていくと、熱狂の色が彼を包み込むように不意に音楽が空気に満ちて、闇を照らし出す炎の音が耳に届いた。

彼はからだの芯から熱いものが引き出されるさまを感じた、煌々と輝く炎が眩しく、雑多な音の中の情熱的なリズムが彼の全身を刺激した。彼はこの高まりにからだを酔わし、聴覚を刺激する情熱に喉を鳴らした。

激情、躍動、歓喜、本能……こんな感覚、ターミルは初めてだった。

そこには何の策謀もなく、何の虚栄もない。虚しい王冠の争いもうわべの褒めごとも存在しないようだった。

彼はそれに激しく惹かれた。たとえそれが王の喪に服すこの時期に逆らっていても、彼はそこに混じらずにはいられなかった。

彼は木の枝を掻き分けて、ブロンドの髪に葉が引つかかるのも構わず、祭りの敷地に出た。目に飛び込んできたのは明るい光。中央に君臨する炎を囲って、男女が踊ったり歌ったり楽器を演奏したり。酒を呷って、酒に飲まれて、ボトルを抱えて夢に旅立ち、ボトルを片手に陽気に歌う。笑いが彼の耳をつんざき、酒気が彼の鼻を覆った。

これは庶民が行う凡俗な祭りだ、彼は思った。けれど、その凡俗なものに心が捕らわれていることを否認なかった。耳慣れないリズム、耳慣れない和音、耳慣れない旋律に包まれて、彼はしばし、軽快なダンスに見蕩れた。そこへ、その視界に一人の女性の姿が入った。その表情ははっきりとは見えないが、彼は彼女と目が合った気

がした。

「どこの坊やかしら？ その顔は見たことがない気がするけれど」女性もターミルに気づいたようで、炎を囲む輪から離れて、緑のボトルを片手に少々左右に揺れながら、ターミルの方へ歩いてくる。その長身はワインレッドのドレスに包まれ、金の刺繍が施された裾を足元で揺らしている。艶やかな黒い髪は波打って光を反射し、何も飾りを付けていないのに、それだけで豪華だった。曲線を描いた細身のシルエットは美しく、顔を横に向けたときのその輪郭といったら、なんとという鼻梁だろうか。その高い鼻は自信を表しているが、繊細であった。飾りなど、手首で揺れる腕輪だけなのに、ターミルが今まで見てきた女性の誰よりも豪華で優美で繊細であった。

「あなたは……」

炎の女神か、そう喉まで出かかった言葉を彼は飲み込んだ。

彼はそこでたちまち恥ずかしさを感じた。こんなに素晴らしい女性の前で、彼は対等に渡り合えるような立派な身なりをしていなかった。土と泥に汚れたばろが彼の服装だった。だが、思い直して、彼は背筋を伸ばし、顎を引いて、顔に柔らかな表情を浮かべ、そして最後に深く辞儀をした。田舎ものではない、まるでどこかの貴族であると言うかのような身のこなしであった。

そんなよそ者のターミルの様子は赤いドレスの女性にとって異様であったのかもしれない。彼が頭を下げた途端、女性は立ち止まった。ほろ酔い気味でありながらも、彼女は首を傾げて、分析するかのように細部にまで目を配りつつ、ターミルへ近づいていった。

女性が不審とするのも当然のことであった。ターミルは貧しそうな身なりとは不釣り合いに、教育を受けたものだけが持ち得る品格に溢れ、肩にかかるブロンドの髪は十分に手入れされており、端正な顔には貧乏人の苦勞の跡など表れていなかった。

「あなたのお名前は？」

「ターミル」

ターミルは答えたが、名字は言わなかった。

「私はノルハディヤ。ようこそ」

女性はボトルを持っていない手でスカートの裾を少し持ち上げ、頭を下げた。

「ノルハディヤ……それは、素敵な名前です」

ターミルはどこか恍惚として“ノルハディヤ”を発音した。

「暗い夜の光明を見つけた気がします。ここに辿り着いたのはきつと光のお導き。久しぶりに楽しい時間がすごせるような気がします」

「それならば、さあ始まりのお酒をどうぞ！」

ノルハディヤは広場の隅の木のベンチへターミルを案内し、そのベンチの上で寝息を立てている酔っ払いから彼が抱えているボトル抜き取ると、酔っ払いを転がし落としてターミルにベンチを勧めた。手荒なのではないかとターミルは思ったが、酔っ払いは気持ちよさげに眠っているの、ノルハディヤの勧めに応じた。

「さあ、これはあなたに」

ノルハディヤは彼女が最初に手にしていた緑のボトルをターミルに渡し、ターミルの隣に腰を下ろした。

「美しいお客へ乾杯！」

ノルハディヤが声高く告げると、二人はボトルを打ち合わせて、それごと酒を呷った。

「……何かあなたは妙なことを言いませんでしたか？」

ターミルは酒をよく味わい飲み下すと、俯いてそう切り出した。

「いいえ、妙なことなど言っていないですよ。よそからの訪問者は珍しい上に素敵な男性が来てくれたのですもの。美しいなんて言われ慣れているのではないのですか？」

そう言って、ノルハディヤはくすくすと笑った。

「それはあなたこそではないのですか？」

ターミルは顔を上げて、炎の光に照らされたノルハディヤの顔をちらっと見ると、そう言ってまた顔を下に向けた。

「ねえ、なぜそんなに下を向いているのです？」

ノルハディヤはまったくくすくす笑うと、ボトルを置いて、ターミル

の方へからだを向けた。

「恥ずかしいのですか？」

そう言って、ノルハディヤは両手でターミルの頬を挟んだ。

ターミルは、女神のようなノルハルディヤが実は意地悪なのではないかと思った。なぜなら、今悪戯に微笑んだ彼女の顔が彼の顔のとても近くにあったからだ。

「あなたは不思議です。この服はあなたには似合わない。何かを隠しているような、気がします」

両手でターミルの顔を持ち上げたノルハディヤは、正面から彼の瞳を見つめた。いや、見ているのは、瞳の奥の心の奥だったかもしれない。

ターミルは恐ろしくなって、目を逸らした。

ノルハディヤの目は心の奥を見透かすようなではなく、見透かす力を持っていると確信させる薄ら寒さがあった。瞳から心の中へ入り込み、その奥にある扉を開かれるところで、ターミルは目を逸らした。

「不思議なのはあなたです。……いえ、この祭り自体が不思議です。今は王の喪に服す期間。こんな祭りを開いていることが知れたら、あなたがたは処刑ですよ」

ターミルは、ここに足を踏み入れる前に思った疑問を口に出した。どうでもいいようなことに感じたが、今は何か別の話題が欲しかった。

「この祭りは大切な祭りなのです。命と同じ様に。……どんどん飲んでください。お酒はたくさん用意していますから。お口に合わないですか？」

ノルハディヤはまたボトルを手にとると、勢いよく飲み干した。ターミルはそれに圧倒されたが、女性がこんなにも酒を呷るのを始めてみたターミルにとって、それはいつそ快いものだった。つられて、彼もボトルを飲み干し、二人は空のボトルを打ち合わせると顔を見合わせて笑った。

ターミルは頭がすっきりして、今は難しい考え事はよそうと思った。

「おいしいお酒です。これはぜひとも家に持ってかえって——」
ターミルはそこで言葉を切った。せっかく気分が良くなったのに、もう少しで悲しいことを思い出すところだったのだ。この楽しい場所で涙を流すことはない、と彼は思った。

「まだ飲みますか？ それとも、踊りませんか？ あの輪に混じって」
ノルハディヤはターミルの両手を掴んで、彼に笑みを見せた。

「ええ！ ああ、でも踊りが分からないのですが」
彼はノルハディヤに手を引かれるままに立ち上がったが、恥ずかしそうに踏みとどまった。

「心配なさらないでください。もちろん、私が教えますし、踊り方なんてありません。思うように踊ればいいのです」

いつもなら、男であるターミルがダンスのリードをしていたが、今は違った。ノルハディヤに手を引かれるということに、ターミルは違和感があったが、それを素直に受け入れることができた。

炎の近くに来ると、夜の寒さを忘れる暖かさが二人を包んだ。どちらもお酒を飲んでいて、からだの中から温まっていたので、炎の熱は暑いほどであった。その熱が祭りの興奮を一層盛り上げていた。
ノルハディヤはスカートをたくし上げ、裾を結んで丈を短くした。叫び声を上げて、輪の中に加われれば、ターミルの手を引っ張って、隣に連れてくる。

「さあ、手を打ち合わせて！」

鼓を打つリズムに合わせて手拍子をし、激しく掻き鳴らされる弦楽器とその上に重ねられる素朴な笛の音を調和させた旋律に合わせて踊り手たちは大地を踏み鳴らし、足を打ち合わせ、足を交差させてくるりと一回転する。膝を叩いて、近くの人と手のひらを打ち合わせば、「おい！」と声をかけて、雄叫びの合唱を起す。腰を絶妙に振る美女に酒のボトルを持った男が雄叫びを上げて近づけば、美女は男の頬をパシリと叩くことで演奏に参加する。美女たちも気に

入った男を見つければ、激しく四肢を動かして男たちに口笛を吹かせる。

ターミルは中身がありそうなボトルを見つけて、輪を抜け出した。自分の分とノルハディアの分を手にとると、また輪に戻った。

「もう一本どうです？」

ノルハディアと楽しそうに笑いを交わし踊っていた男を、ターミルは半ば弾き飛ばすような形で押しのけると、ノルハディアの手にボトルを握らせた。

「ありがとう」

二人はボトルを打ち合わせるとラッパ飲みしつつ踊りだした。口の端から泡を立てながら零れていく酒など気にしない。炎が音を立てるのが気持ちよい。酔っ払いが落としたボトルの割れる音が気持ちよい。栓が抜ける時の空気の音が気持ちよい。誰かがボトルを振りすぎたのか、酒の噴水が上がっている。それを見たら真似をしたくなったのか、新しいボトルを手に入れ、それを踊りながら振る者たちが現れた。

「はい。あなたの分です」

初めて見る顔のターミルを珍しがって集まった女たちの中に割って入って、ノルハディアは栓がされたボトルをターミルに渡した。

「ありがとう」

二人もボトルを振りながら、踊った。

リズムを刻む鼓に合わせて手拍子をし、掻き鳴らされる弦楽器の上に素朴な笛の乾いた音が幾つも被さる。踊り手たちは胸に響く大地の唸りを紡ぎだし、幾通りもの自由なステップを作り出し、体を楽器にして笑みを交わす。それを盛大に飾ったのは高く噴き出す幾つもの酒の噴水だった。

第二章 犠牲者

第二章 犠牲者

「汗を掻いてしまいましたよ。でも、もう汗だか酒だかわからなくなっていました。とても楽しい」

休憩するために、最初に二人で酒を飲み交わしたベンチへやってくる、ターミルは満足そうな笑顔でそう言った。

「私もとても楽しいです。今日は特別に楽しい。お酒のシャワーも浴びて、すっきりしました。髪も服もべたべた」

ノルハディヤは肩を竦めて、朗らかに笑った。彼女は酒を含んだ髪を右肩で集めると、ぎゅっと絞った。酒が線になって地に落ち、水溜りをつくる。

「どうぞ、お使いください」

苦々しそうに顔を歪めたノルハディヤの目の前に白いハンカチが差し出された。ノルハディヤが顔を上げれば、ターミルが微笑んでいた。

「ありがとう」

ハンカチを受け取り、まずノルハディヤは顔を軽く拭くと髪を拭いていく。

「気が利きますね。あなただって、濡れているのに」

目を逸らして控えめに言うノルハディヤの唇は綻んでいた。

ターミルはこの隙に炎に照らされた彼女の顔をじっくりと観察することにした。

湿った髪が張り付くノルハディヤの頬は上気し、意志の強い目を縁取る睫毛は酒に濡れ、絶妙なシルエットの通った鼻梁を汗か酒かが伝う。そして、ふくよかな唇はみずみずしいさくらんぼうのようで、一言で言えば魅力的だった。

「大丈夫。そんなに必死にならなくても、その美しさは損なわれま

せん」

ターミルはノルハディヤの目に掛かる髪を除けながら、夢見心地でそう言った。

ノルハディヤはたと手を止め、ターヒルに見入ると、吹き出した。

「ずいぶん酔っているようですね。もうこれ以上のお酒はあなたを獣に変えてしまいそうだわ」

「酷い！ 笑うことはないのですか！ 褒めているのですよ。あなたはすぐ人を馬鹿にする」

ターミルは一気に夢から引き戻された気がした。顔を顰めるのを忘れない。

「ありがとう。でも、今の台詞はあなたには似合わないわ。恥ずかしがりやだと思ったのに、よく私の顔を見てそんなことを言う」

「似合わなくて、すいませんね」

ターミルは膝の上に頬杖をついて、ノルハディヤから顔を逸らした。彼はどうにもノルハディヤの手玉に取られているよう気がしてならなかった。

「このハンカチは洗って返します。もし、あなたが明日もこの祭りに来てくれるならいいのですけど」

ノルハディヤはハンカチを絞った。酒か汗かが音を立てる。

「明日もこの祭りはやっているのですか？ いつまで続くのです？」

「赤い月が出る日まで」

金色に輝く月を眺めながら、ノルハディヤは口角をきゅっと上げて、小さく笑んだようだった。

「赤い月ですか？」

赤い月など見たことがないとターミルは思ったが、そんなことより、ノルハディヤとまた会うことが出来るのかどうかという方には彼には重要だった。

「あなたは明日もこの祭りにくるのですね？」

「ええ。この祭りが終わるまで毎日、私はこの祭りに来ますよ」

「それは良かった！ では、明日もここに来ます！ ああ、ハンカチは持って帰ります」

ターミルはノルハディヤの手からハンカチを抜き取ると、キュロツトのポケットに突っ込んだ。

「ああ、洗っておきますのに」

ノルハディヤは驚いて手を伸ばすが、ターミルはやんわりと断った。

「もうそろそろ帰らなければ。また、明日」

ターミルは立ち上がって、頭を下げた。

「待って。では、馬をお使いください」

ノルハディヤが言うのと、どこからともなく嘶きと共に黒い馬がたてがみを風に流して走ってきた。酔いしれる人々の合間をたくみにすり抜け、ターミルの前で止まり、静かになった。

「ありがとうございます。こんなにも美しい馬を」

ターミルは、銀に輝くような馬のたてがみを撫で、その触り心地に息を呑んだ。

「その子はとても賢いから、あなたの家まで近くて安全な道を選んで、乗せていってくれます。……さあ、最後に一杯どうぞ」

ノルハディヤは、いつの間にか用意していた酒の注がれたグラスをターミルに差し出した。ターミルは実際、もう酒は十分だったが、鼻を掠めたそのいい香りに思わずグラスを手にとってしまった。「ありがとうございます」

彼はそれを一気に飲み下すと、ノルハディヤにグラスを返し、馬の背に上がった。

「必ず、明日来てくださいよ。待っていますから」

ノルハディヤは馬上のターミルを見上げて微笑むと、馬が発発できるように数歩後ろへ下がった。

「もちろんです。では、また明日！」

ターミルが馬のわき腹を軽く蹴ると馬は風に乗るように走っていた。

あつという間にターミルを乗せた馬は木々の間に消え、蹄の音も遠のいていった。

風が過ぎていって、また祭りの喧騒がノルハディヤの耳に戻ってきた。彼女は、先ほどターミルに渡したグラスに今一度酒を注ぎ、最後の一滴まで味わうと祭りの輪に戻っていった。

ターミルは馬上で風を受けながら、何か聞き忘れていることがあるのではないかと、ぼんやりと考えていた。それが何だったのかは思い浮かばない。だが、もしそれが重要なことならば、あとで思い出すこともあるだろう、と彼は頭を横に振った。

馬はターミルの誘導なしでも迷うことなく石畳の道を駆けていった。真夜中にも関わらず、人が群がっている通りもあったが、それを馬はうまく避けていった。その足の速さに関して言えば、ターミルが今まで乗ったどの馬よりもはるかに早く走った。空を走るかのような勢い。だが、振り落とされないようしつかりしがみついておかなければ、というようなことはなかった。受ける風は頬を撫でていくような優しさで、振動も鼓動と共鳴し合うような心地よさがあった。ターミルはこのまま馬上で眠りに落ちてしまうのではないかと思った。時間も時間であるし、酒も回っている。少しぐらい目を閉じて、この賢い馬なら心配ないだろう、と彼は瞼の意思に従おうとした。その時、馬が足を止めた。早くも家に辿り着いてしまったようだ。ターミルは渋々眠い目をこすり、馬から降りた。彼が馬から下りてしまうと、馬は再び風のように去ってってしまった。一人残されてしまうと、寒気が彼の背筋を這い上がってきた。夜の寒気というよりも、目の前にそびえる彼の家から冷え冷えとした空気と緊張感を感じ取ったからだだった。

月の光を受けた白亜の壁は、ターミルから祭りの興奮を奪い取った。熱狂なんてものは、この“聖域”に立ち入るのを禁止されているかのように。

裏門にまわり、自分で秘密裏に作った鍵でその門を開けた。

この時期、門番はいない。門の番より派閥に所属することの方が大切だ。そして、門を守るより派閥のリーダーを守ることが望まれるのだ。

門の中に入れば、空気は一層緊張感を帯びた。ターミルの右手は自然と腰から提げられたサーベルへ伸びる。彼はその柄を握って、いつでも抜刀ができるよう備えをする。ついこの間まで手入れされていた庭園をできる限り陰を通して抜けていった

真夜中の静けさが廊下を満たしていた。だが、全てが眠っているわけではない。息を殺して暗闇から目を光らせる者がいるかもしれない。

ターミルが廊下の角を曲がろうとしたときだった。すすり泣く一人の女の声が聞こえた。それと、幾つかの男の声。

ターミルは足を止めた。

「サラム。ああ、なぜなの……嘘でしょ？」

その声はジャミーラだった。彼の妹。彼らの兄弟の中で唯一の女子である。

「こんなの嫌よ……サラム……サラム……」

震える声で囁くジャミーラは泣きやむことを知らないかのようにだった。止めようにも止まらない鳴咽が廊下に響き渡る。悲愴な場面であった。

サラムは長子であった。兄弟たちの中で最も聡明で勇敢であった。ターミルは彼と張り合いながらも、尊敬していた。そんなサラムは最近、ジャミーラとの仲を噂されていた。ジャミーラはサラムの傍らを一時も離れることがなかったという。もともとたった一人の妹を大事にしてきたサラムだが、その保護は過ぎるものではないか、二人はまるで愛し合っているようだ、と周りの者たちは囁きあった。ターミルにはわけが分からなかった。ジャミーラは“死のゲーム”への参加を宣言したのに、その宣言後、彼女は大人しくサラムに付き従っているだけだったのだ。本当に参加する気があるのか、そ

れともこれが策略なのか。ジャミーラは活発であり、大人しいという性質ではない。

「ジャミーラ。お前は どうしたい？」

男の声が聞こえ、ターミルはおずおずと様子を窺った。

二番目の兄、アサドであった。娯楽好きであったが、剣の腕前はなかなかのものであった。

アサドは支持者たちを連れ、座り込んだジャミーラに剣を向けていた。ジャミーラは剣など気にならないといった様子だった。涙をひたすら流し、動かないサラムのからだを抱きしめていた。

「“愛しい” サラムの後を追うか？」

アサドが皮肉な笑みを浮かべたときであった、ジャミーラはびくっ、とひきつった顔を上げた。そこには恐怖が表れていた。

「死にたくないか？ ジャミーラ」

アサドは剣の切っ先でジャミーラの顎を撫でる。

「アサドお兄様。私は……死にたくありません。だから……だから……何でもしますから……」

ジャミーラは床に手を付き、涙に濡れた黒い瞳でアサドに請うた「都合のいい事を言うなあ」

ジャミーラを見下ろして、アサドはくつくつと笑う。

「では付いて来い」

とうとう、アサドは剣を鞘に納め、ジャミーラに背を向けた。

「イフラーズ、ハーシウ。サラムの始末をして来い」

二人の従者にそう命令すると、アサドは歩き出した。その後を彼の従者に囲われてジャミーラが付いていく。俯いて、口元を押さええながら。

後には二人の従者が残された。その二人はこれからサラムの遺体を墓に埋めにいくのだ。

ターミルは一步後ずさりすると、音を立てないように廊下を引き返していった。やはり、サーベルの柄へ手が伸びるのは抑えられない静かな暗闇から敵は隙を窺っている。

ターミルは一瞬たりとも緊張を解けない。

しばらく歩いて、彼は一つの部屋の扉をゆっくりと開けた。どんな息遣いをも逃さないよう耳をそばたて、夜行生物のように目を光らせ、開けた隙間から部屋を窺った。右手は柄を強く握る。影よりも身を潜めて部屋に滑り込んで、すばやく、だがやはり静かに扉を閉めた。

ソファを認め、彼はそこへ足を運んだ。どうやら、他にだれもないらしいので、緊張を少しだけ解き、彼はソファに身を沈めた。右手は柄から離れ、両目を覆った。

この部屋は元来、客間であった。ここを訪れた高貴な人々を通し、使用人たちが茶や菓子を出して、賑やかな談笑が行われていた。こしばらく、そんな活気は遠のいている。今は使用目的を失っている。

談笑の代わりに、ターミルの目を覆った手の下から涙が零れた。それは、彼の頬の上に軌跡を残し、膝の上に落ちて、染みをつくった。

彼が尊敬していた兄の温かな笑顔は奪われてしまったのだ。

夜の次には朝が来る。孤独に同情してくれる闇は去り、自分勝手に微笑み、世の中の広さを示すだけ示して突き放す朝がやって来る。ターミルは自室で肘掛け椅子に座っていた。右手には一冊の革張りの本。夜の間、ランプの光を頼りにそれを読んでいた。今は薄いカーテンを通り抜けバルコニーから差し込む光があるので、ランプは必要ない。

本はほとんど読み進められていなかった。死んだサラムのこと、それを殺したアサドのこと、泣き続けたジャミーラのこと、頭の中から離れなかったからだ。気を紛らわそうと思って手に取った叙事詩も役には立たなかった。それでも、夜の殻に閉じこもっていられた間は良かった。今は太陽が外に出よと手招きをしてくる。この日に限って、朝のなんと晴れやかなことか。彼は暗く沈んだ自分が見

下されているような気がした。

昨日までで、五人の兄弟が死んだ。

自分がいつ殺されるか、という恐怖より、身内で殺しあわなければならぬ虚しさが彼の心を覆っていた。

彼はしおりを挟んで本を閉じ、サイドテーブルに置いた。立ち上がるとバルコニーへ向かい、カーテンを開けた。バルコニーには二人の兵士がいた。一人は壁にもたれ、浅い眠りに入っている。もう一人は背筋をピンと伸ばした兵士で、彼はターミルに気づいた。ターミルはガラス戸を開けた。

「おはよう、アースィム」

「おはようございます。ターミルさま」

ターミルが声をかけると、背筋を伸ばした兵士は頭を下げた。

「警備、ご苦勞だった。ハーリスは眠っているのか」

ターミルは壁にもたれている兵士を見た。その時、その兵士はターミルの気配を感じたのか、目を開け、あたふたと身繕いして立ち上がり、敬礼した。

「失礼いたしました！ これは決して怠けていたのではなく……」

「分かっているよ、ハーリス。休憩の時間だったのだろうか？ 邪魔をすまない」

ハーリスは敬礼したまま、目を伏せた。

「二人ともご苦勞であった。もう、私は起きたので、バルコニーの警備は必要ないよ。また、私が呼んだ時に来てくれ」

「ですが、どこからターミルさまのお命を狙う矢が飛んでくるかわかりません」

アースィムは仁王立ちになって、この場を離れない、という意味を表した。

「心配ありがとう。だが、このように一日中、まるで監視されているように警護されていても、気持ちが悪く落ち着かないものでね」

「たしかに……そうですね。ですが、昨日のようにたった一人で町へ繰り出すなんてことなさないでください。なんという恐怖だ

ったことか。あなたには監視も必要なのです」

「わかつているよ、アースイム。ハリスも疲れているようだし、小言はやめて早く休憩に行くといい」

言葉の切れないアースイムの背を押して、ターミルは兵士二人を廊下へ追い出した。

一人になると、ターミルは部屋の扉を閉めて、バルコニーのガラス戸を閉め、カーテンまで引いた。部屋は当然暗くなり、戸の向こうの鳥の鳴き声が遠くに感じられた。

彼はベッドに潜り込んだ。夜に眠らなかった分を取り返そうという魂胆だ。そして、今夜に備えて。

目を瞑ると、さらに闇が広がった。ターミルは寂しさを感じたが、それはやがて安堵へと変わっていった。

気がかりなことは全て断ち切られた。闇が外界から彼を切り離し、一切の煩わしさを取り除く。柔らかく、優しく、緊張した心を徐々にほぐして、闇は彼を眠りの世界へ導いていく。静寂の世界、安寧の世界、庇護の世界。いつしか、ターミルの寝息が部屋に漂い始めた。

太陽が今日最後の光を地平線に投げかけるころ、ターミルは鏡の前で身支度をしていた。髪を丁寧に梳き、輝くその金髪を深緑のリボンで結んだ。首にはリボン結びにしたスカーフ。町で目立たないように飾り気はないが、彼は、ノルハディヤと並んで恥ずかしくないようにできる限りを尽くしたつもりだ。昨夜の悲惨なぼろとは違う。

ターミルは心が浮きだっているのを感じた。昼夜が逆になって、いつか夜行性になってしまうのではないか、と思ったが、それでも心が浮き立つのを抑えられなかった。昨日、ここに帰ってきてからの息苦しさはどこにもなく、幸せだった。だが、悲しいことに、彼にはこれ以外の幸せを見つけれなかった。

彼は、部屋の前で警備をしている二人の兵に対して、隣の衣裳部

屋から何か物音がする、と嘘をついて見に行かせると、その間に部屋を立ち去っていった。

第三章 贈りもの

すっかり太陽は沈み、今日も月が暗い空に黄金色に輝いている。ターミルはそんな月を見上げて、ノルハディヤに思いを馳せた。すでに森の前まで来ているのだ。木々を抜ければ、あの光にまた会える。胸に何か抑えられないものがこみ上げてくるのを彼は感じた。もうここにじっとしてはいられない。早く、森の広場に出よう、と彼の足は浮き足立っていた。

今夜も森の調べに導かれ、木々を分け入っていく。音楽に身を包まれ、炎が弾ける音が耳に入り、暖かな赤い光がちらつくのが見えた。辿り着いた、お祭りに。彼は祭りを見回し、ノルハディヤの姿を探した。彼女を見つけるのに時間はかからなかった。

「ターミル、本当に来てくれたのですね！」

ノルハディヤの方から現れた。

「こんばんは」

ターミルは浅く辞儀をした。

「こんばんは」

ノルハディヤは、昨夜とは違うがやはり赤いドレスを着ていた。

胸元の精巧な銀糸の刺繍が目を見張る。

「あなただと、すぐには気づきませんでした。まるで昨日とは別人。どこかの王侯貴族のようです」

ノルハディヤは気品ある服装に身を包んだターミルを下から上までをじっくり見た。

「ありがとうございます。あなたと釣り合うためにできる限り身なりを整えなければ、と思ひまして」

「会った時から思っていましたよ。あなたは絶対名だたる家の出身だろうと。なぜ、身分を隠そうとするのです？」

「身分など必要でしょうか？ そんな話などしないでおきましょう」
ターミルは顔の前で人差し指を立てた。

「そうですね。さあ、こちらに来てください！　お酒を用意しておきました」

ノルハディヤはターミルの手をとって、昨日のベンチへ連れてきた。そこにはすでに酒のボトルが一本と銀のグラスが二つ用意されていた。二人はそこに腰を下ろした。ノルハディヤが二つのグラスに酒を注いだ。酒は透明な緑のような青のような不思議な色をしていた。

「こんなお酒は見たことがありません。一体、何というお酒です？」

ターミルはグラスを掲げて、月の光で液体を窺った。

「これはファルゴラーレというお酒。真澄の月光と夜のしじま、翡翠の緑が作りだした珍酒。とても強いお酒です。一口飲めば、このお酒に魅了されるはずです。さあ、乾杯をしましょう！」

ノルハディヤは揚々とグラスを掲げた。

ターミルはノルハディヤの説明の意味がまったくわからなかった。本当のところ、怪しげに思った。だが、今までに嗅いだことのないとても良い香りに抗うことはできなかった。

彼もまたグラスを掲げて、グラスを打ち合わせた。その酒を味わっていくと、ターミルはからだの芯から熱がこみ上げてくるのを感じた。気持ちよい酔いの熱。

「どうです？」

ノルハディヤはターミルを下から見上げるようにして、彼の瞳を見つめ、ベンチの上に置かれた彼の左手に手を重ねた。

ターミルは、今顔が徐々に赤くなっているのではないかと感じた。頬が熱い。心臓の音も体中に響くように高鳴っていた。ノルハディヤの瞳に引き込まれ、その手が柔らかくて、彼女の手を握った。それにノルハディヤは驚くことなく、握り返した。

「なんだか恐いです」

ターミルは情けないことを呟いてしまった、と思ったが、それは真実の感想だった。目の前の美にいつか覆われてしまうのではないかという恐怖。

「何が恐いのです？　ここは幸せになる祭りです」

「だから、恐いのです。……幸せすぎて、いつかここから出られなくなるのでは、と思ひまして」

ターミルは笑って、ノルハディヤの頬を撫でた。指に吸い付くように柔らかく、滑らかな肌だった。

「出られなくていいではないですか。幸せなのはいいことですよ」

ノルハディヤも笑い、彼女の頬を撫でるターミルの手に自分の手を重ねた。

「ですが……そうはいかない」

ターミルはノルハディヤの肌の感触を愛おしく思いながらも、胸がずきずきするのを感じた。

「なぜです？　ここにいて、楽しく過ごしましょうよ！」

相変わらず、ノルハディヤは美しく、女神以上に人を惹きつける、本能に訴える笑顔で首を傾げた。

「現実がありますから」

ターミルは胸の痛みが一層強くなったのを感じた。兄弟たちの死。彼の支持者たち。彼の立場。そして、世の中から“死のゲーム”を隠蔽する白亜の壁。それらは、彼の胸の内に呼吸を妨害する石のような塊を形作った。この幸せを知らなければ、できなかった塊。

この幸せを知ったからこそ、彼は現実を恨んだ。

「けれど、せめて夜だけはここに来たい」

この幸せがなければ形成されなかった塊を消すには、もはやこの幸せに浸り我を忘れることだけ、ということをつターミルは知っていた。

ノルハディヤは、月の光のように優しく笑った。

「毎夜、毎夜、あなたを待ちますから」

彼女は頬を撫でていたターミルの手から自分の手を放し、立ち上がった。

「今日も踊りましょう」

彼女は繋いでいたターミルの手を引っ張った。炎を囲む輪に加わ

ろうとする。だが、ターミルは手を放した。

「すいません。今日はもう帰ります。でも、明日は踊りましょう」

ターミルは再び馬を借りて、家へ帰った。彼は自分の気持ちを抑えるだけで精一杯だった。ノルハディヤの笑顔は彼にとって危険な美しさだった。彼の心を優しく包み、満たし、彼女のことで以外を忘れさせるような魔法だった。肌の温もりから離れるのが恐ろしく、瑞々しい唇に触れたかった。この感情を何と呼ぶかは分かっていたが、真に認めるのは怖かった。それを認めれば、生に対するあきらめを失ってしまうだろう、と彼の中で何かが忠告していた。生に恋すれば、それは“死のゲーム”から逃げることに。または……。

家に着けば、白い壁が彼の熱気を奪った。高く天へ伸びるそれは、さながら、彼を囚人であるかのように冷たく扱う牢獄だった。この牢獄の最高責任者になるには、生に恋して“死のゲーム”を全うすること。

彼は牢獄を嫌い、毎夜毎夜、家を抜け出しては祭りへ、ノルハディヤの元へ向かった。彼の支持者たちには小言を言われたが、何よりも頭に浮かぶのはノルハディヤだった。生に対するあきらめを失うのが怖くとも、やはり、ノルハディヤと過ごす毎夜が待ち遠しかった。

今夜、ターミルはノルハディヤへの贈り物を携えて、祭りへやってきた。

祭りの会場に着くなり、彼はノルハディヤと初めてお酒を飲んだベンチへ駆けていった。ベンチに着けば、ノルハディヤが笑顔で、酒が注がれたグラスを彼に渡した。そして、グラスを打ち合わせ、酒を呷る。これが習慣になっていた。

「ノルハディヤ。今日は、渡したいものがあるのです」

「あら、何ですか？」

もちろん、ノルハディヤはターミルが何かを持ってきているのに

は気づいていた。彼女は、彼が背後からそれほど小さくはない箱を取り出すのを見ていた。

「これです。気に入ってくださいるといいが」

「今、開けていいですか？」

「どうぞ」

ノルハディヤはターミルから箱を受け取り、百合の花が彫られた箱の蓋を開けた。

「まあ、これは……」

それはシルクのショールであった。闇夜の色と月光の色のグラデーションのそれは、一言では言えない神秘の美しさを持っていた。ある角度からは、それは小麦畑の妖精の表情を見せ、ある角度からは深い森の湖の瞬きのようであった。

「美しいわ。私には勿体ないほどの」

「いえ、あなただからこそ、似合うだろうと確信しましたよ」

ターミルはノルハディヤの手からショールを取ると、それを彼女の肩にふわりと掛けた。

「これで、肩を冷やさないようにしてください」

ターミルがそう言うと、ノルハディヤは小さく吹きだした。

「保護者みたいな言い方ですね」

「そんなことはありませんよ。あなたが、そんな風に肩を出しているから」

笑われたターミルは眉をひそめて不服を示した。

「肩も女の魅力の一つ。それとも、私の肩は見るに耐えられないかしら？」

ノルハディヤは意地悪そうに肩眉を跳ね上げた。

「そういうわけではありません。ただ……」

ターミルは言葉を失ってしまった。そんな彼を見て、ノルハディヤはくすくすを笑う。彼は、そんなノルハディヤの揺れる肩がショールに包まれているのを見て、安心した。ノルハディヤの細い肩は頼りなく、ターミルを不安にさせていたのだ。

「今日はグラートの日。私の歌を聴いてくれますか？」

ノルハディヤは立ち上がって、ターミルに礼をした。

「あなたも歌うのですか！ もちろん、よろこんで」

今日の祭りはいつもと違っていた。一人ずつ楽団の演奏に合わせて、情熱的な歌や朗らかな歌や悲しい歌を歌っていた。歌の言葉はターミルの知らないもので、その意味は理解できなかった。だが、どの歌い手も上手なので、その雰囲気は伝わってきていた。

炎の前にいる者が歌い終わった。やはり上手なもので、拍手が沸き起こった。だが、それよりもターミルは、ノルハディヤがどのような歌を歌うのか待ち遠しかった。

ノルハディヤは、ターミルから贈られたシヨールを肩に掛け、炎を取り囲む輪の中心へ歩いていった。彼女がお辞儀をすると、楽団が演奏を始めた。

雲の隙間から月が光を投げかけ、風が一筋、彼女の髪を揺らした。

彼女は歌い始めた。

月はまだ仮面を被ったまま

あなたを迎える光は偽り

狩が始まり いい男を探す

私の魂を揺さぶるほどの魂を

探し出した あなたという命

酒という魔法があなたを捕らえる

笑顔が味付け 美しいあなた

あなたの命は私にとっての魔法

指が触れた時に思うことはこんなこと

あなたの肌は柔らかくっておいしそう

あなたのワインの血は鮮やかで蕩けそう

なんてすてきな贈り物なのかしら

私が毎夜思うことはこんなこと
あなたの血潮が私の喉を下っていく
あなたの肉が私の命を作っていく
なんて素敵な贈り物なのかしら

月が素顔を現す夜に
二つの魂は一つになる
燃える炎を感じ 眠るあなた
そんなあなたはすでに私の魂

月が仮面をとるまで
幸せな夢をみせましょう

ノルハディヤが歌い終わると、拍手喝采が沸き起こった。炎さえも燃え盛って、彼女を讃える。立ち上がって、ターミルも拍手を送った。何を歌っているのか全く分からなかったが、彼は自分に送られた歌のように感じていた。乙女が月夜にバルコニーから想い人にあてたような切なさがあり、だが甘美で情熱的な響きを持っていた。ノルハディヤがターミルの元へ帰ってくると、二人は抱擁を交わし、ターミルはノルハディヤを褒め称えた。

「あなたの歌声を聞いたら、だれもがあなたに恋しますよ。あなたは世界一の歌姫です。ぜひとも、わが城にきていただきたい」

ターミルはノルハディヤの手を握って、そう言った。その何気なく言った言葉にノルハディヤは引っかけかりを覚えた。

「あなたの……お城？」

「あ、いえ、その、我らの君主のもとで、という意味です」

ターミルは慌てて取り繕った。

「嘘は見逃せませんわ。あなたは国王陛下でいらっしゃるの？」

ノルハディヤは一步下がりを、恭しく頭を下げた。

「ご冗談を。まさか、まさか。それに、国王陛下はご逝去されたばかり。今は、次期国王を待っているところです」

頭を下げてしまったノルハディヤを下から覗き込み、ターミルは誤解を解こうとした。だが、ノルハディヤは訝しげに眉をひそめたまま、再び彼に質問をした。

「では、もしかしたら王子さまでいらっしゃるのでは？」

「王子？　王子がどうしてこんなところにいると思いますか？　おかしいことを言いますね？」

ターミルは大げさに笑いながら、ベンチに腰を下ろした。

「さあ、一杯どうですか？」

ボトルを持って、彼はノルハディヤに座るよう促した。

「いつか、あなたの正体を暴いてみせますわ」

強気にもそう言う、ノルハディヤはベンチに座り、グラスをターミルに差し出した。ターミルはそこに酒を注ぎ、自分の分にも注いだ。

「とにかく、ありがとう。この、シヨール。それから、歌を聴いてくれて」

ノルハディヤはグラスを両手で抱え、一気に飲み干した。

「今日はいつもより温かい夜だわ」

彼女はグラスを傍らに置くと、ターミルの肩へもたれかかった。

ターミルもまた、飲み掛けたままであるグラスを置くと、酔いのせいか上気したノルハディヤの頬に手をあてた。

「ありがとう、と私こそ言わなければなりません。歌を聞かせていただいて、あなたに感謝します。それから、誰に感謝すればよいのか。あなたに出会えたことに感謝します」

彼はシヨールの上からノルハディヤの肩を掴み、彼女のふくよかな唇に自身の唇を重ねた。無条件に沸き起こってくる感情など、抗えるものではない、と彼は悟った。

今日は良い夢を見るだろうと夢見心地に思いながら、ターミルは

馬上からノルハディヤにお休み、を言った。

彼は、今まで生きてきた中で一番心が優しくなった気がした。世界は幸せでできているのだ、と言ってしまえるほどであった。

黒馬の上で流れていく風に愛撫されながら、ノルハディヤが見えなくなるまで、彼は手を振り続けた。そして、彼女の姿が小さくなって消えてしまうと、後は冷たい空気と暗い通りが彼を迎えるだけだった。それでも、彼の頭の中では祭りの楽団が演奏し続けていた。情熱的な曲もしんみりした曲も、今夜祭りで聞いたあらゆる音が彼の興奮を蘇らせていた。ノルハディヤの歌う姿が、目の前にいるかのような鮮明さで頭の中で再生された。もっと言えば、あたかも彼女が彼の瞳の中に入り込んでしまったかのような鮮明さであった。唇には、まだ彼女のその感覚が残っていた。柔らかで、瑞々しい温もり、そして、酒のほろ苦さを思い出して、彼は自分の唇を指でなぞった。

ターミルの姿が見えなくなったのを確認すると、ノルハディヤはくると背中を返して、踊りの輪に加わろうと駆け出した。だが、何者かがその肩を捕らえた。

「まあ、シャーヒド」

彼女が振り返ると、そこには大柄でスキンヘッドの男が立っていた。「うまくいっているようだな」

彼は唇の端に笑みを浮かべて、ノルハディヤの肩を叩いた。

「もちろんよ。この私は失敗しないわ。彼ったら、こんな素敵な贈り物までくれたわよ」

ノルハディヤは光の加減で表情を変えるショールを広げて見せた。

「私に夢中みたい」

彼女はほくそ笑んだ。ところが、反対にシャーヒドは笑みを消し、真面目な顔で言った。

「おまえもはまりすぎないよう気をつけろ」

「何を言ってるの!？」 相手は、相手は獲物よ! いったってうま

くやってきたわ」

ノルハディヤは目を大きく開け、馬鹿にしないでと言わんばかりに、つんと顎をあげて腕を組んだ。

「だが、目がこれまでと違う」

そう言うだけ言うと、シャーヒドは立ち去っていった。その背中は莊嚴を絵に描いたようだった。見る者に畏敬の念を抱かせるが、近寄りがたく、侵しがたい。故に、獲物は彼に引っぱりにくい。それに比べ、ノルハディヤは獲物を引き寄せる魅力があると自負していた。

どうせ、シャーヒドの妬みだろう、とノルハディヤは鼻で笑った。彼女は、炎を囲んで享樂する踊りの輪に加わった。

第四章 罌

白亜の壁の前に立ったターミルは、自然と心に鍵を掛けた。楽しいという感情も悲しいという感情も、この壁の内側に入ってしまったと厄介なだけだ。感情を閉ざすということが、平安を招いてくれることなのだ。ターミルが一番上の兄の死に涙したのはまだ最近のことだが、彼の死が兄弟の中で一番最近のものだということではない。一昨日は、六番目の兄弟が死んだ。死が溢れる日常で、泣くという感情が存在しているのは、丸一日、泣く以外のことができなくなるだろう。

彼がいつも通り裏門へ回ると、木の上から何かが落ちてきた。

人ではないかもしれないが、彼は思わず、腰のサーベルを握った。

「こんばんは。ターミル兄様」

月明かりの下に出てきたそれは、兄弟の中の唯一の女、ジャミーラだった。

おかしい妹の登場に、一瞬ターミルは気が緩んでしまった。だが、それが妹だとわかった以上、気を引き締め、サーベルに意識を向けた。

「どこから来たんだ？」

「木の上からです。おわかりになるでしょ？ それより、お兄様こそどこから来たのです？ どちらに行かれていたのです？」

ジャミーラは意地の悪い笑みを浮かべた。

「どこかに女をつくったのですか？」

「そんなことは断じてない。それより、お前は どうしてこんなところに、しかも木の上にいた？」

ターミルは妹のからかいを何とも思わず、ただ、ジャミーラの動きに注意した。ドレスを着て、腰にサーベルを提げていない彼女が、どこから武器を出すか分からない。ゆったりとした袖口から武器がでてくるかもしれないし、胸元の大きな首飾りに毒を塗った針でも

仕込んでいるかもしれない。

「木の上にいたのは、ただ私を殺そうとする人たちから隠れるためです。ここにいるのは……ターミル兄様を待っためです」

「私を待っため？　だが……」

「侮らないでくださいね。それでも、生き残っている兄弟たちの行動は細かく観察していますわ。お兄様が毎夜、毎夜、城を出てって、日が出る前にその門から帰ってきていることだって、知っています」

ジャミーラは白亜の壁の中に埋まった裏門を指し示した。

ターミルは意表を突かれた。まさか、支持者のいない妹がそんなところまで目が行き届くとは思っていなかったのだ。

「一人でそこまで調べているのか？」

「いろいろなコネクションがありますから」

ジャミーラは得意げに口の端を上げた。

「コネクション？　どういうことだ？」

そう尋ねたターミルに、ジャミーラは、さあ、と答えただけだった。

ターミルは二番目の兄・アサドを思い浮かべた。サラムの死以来、ジャミーラはそのアサドに付き従っているらしい。二人が手を組んだというより、ジャミーラがアサドの支配下にあるということらしいが、それはジャミーラがアサドの保護下にあると言うことを表すのではないだろうか。ジャミーラにとっては、今や兄弟の中で最強の剣士の保護を受けながら、自分が手を出さずしてライバルが死んでいく、という最高のポジションなのかもしれない。そして、彼女の保護者であるアサドやその支持者たちは、彼女にとってコネクションの一つでしかないのかもしれない。

ターミルは妹を恐ろしく思った。

ジャミーラは従順な仮面を被りながら、いつその仮面を取るかわからない。兄弟たちに可愛がられて育った少女は、いつの間にか策略をめぐらす小悪魔に化けていたのだ。彼女の短い答えは、そう物

語っているようにターミルには感じられた。

「ジャミーラ。私にはどんな罫を仕掛けるつもりだ？」

ターミルはサーベルを抜いた。今や、ジャミーラは一人ではないということに気づいたのだ。彼女にはアサドという強力な盾がある。もしかしたら、アサドがどこからかターミルの隙を窺っているかもしれないのだ。ターミルは誰も傷つけたくはなかったが、まだ死ぬ気にはなれなかった。もう少しだけ、ノルハディヤといっしょに過ぎたい、という気持ちがサーベルを抜いた結果だった。

ジャミーラはさすがに数歩下がった。

「剣をしまい、下に置いてください、お兄様。私はお兄様の命を頂きに來たのではなく、交渉に來たのです」

ジャミーラは真摯な顔になって、深深と頭を下げた。

「冷静で賢いお兄様でいらっしゃるから、正面から挑む方がよいと思っただのです」

面を上げたジャミーラは外交官の風体を持っていた。

「交渉とは？」

ターミルはサーベルを置くどころか鞘に納めもしなかったが、切っ先だけは下ろした。まだ、ジャミーラを信用できないと思っただ。彼は、妹に対する評価を変えつつあった。兄弟の中で最も聡明なのは、もしかしたらジャミーラであるかもしれない。彼が尊敬したサラムよりもだ。きつとジャミーラは、サラムやアサドに対して“交渉”を行ったに違いない。その形は、今から彼らが行おうとするものとはかけ離れていたかもしれないが。

「まず、お兄様は剣を下に置いたほうがよろしいですわ。私は、それがお兄様にとって無意味だと思います。今まで、お兄様は暗殺の計画や実行を行っていないでしょう？ そんな兄弟はお兄様だけ。誰も殺す気がないわけではありませんか？」

ジャミーラはターミルに歩み寄り、彼のサーベルが届く範囲内に立った。彼女は澄ました顔でターミルを見上げた。

「だが、剣は自分を守るためにも存在する」

ターミルは、ジャミーラがサーベルを下に置けとしつこく言うのは、身からサーベルを離れた隙を突こうと彼女が考えているのだ、と思っていた。だから、頑なに拒んだ。

「交渉は対等に。私は武器がありません。だから、お兄様もそれを持つべきではないのですか？」

ジャミーラにとって、サーベルは言葉による交渉の敵であった。武器を持つものは、言葉による敗北を感じたとき、それでも負けを認めずに武器の力に頼るのだ。しかも、その場合の力は厄介な争いを生み、当事者だけでは収集がつけられなくなる、ということを知っていた。

「悪いが、今この場に我々二人だけという確信が持てない限り、この剣はしまえない」

「お兄様も知っている通り、私には支持者はいません。だから、ここには私の敵となる人はいても、お兄様の敵となる人はいませんよ」

「支持者はいなくとも、保護者はいるだろう？ たえば、アサド兄さんだ。それに本当にお前が武器を持っていないのか疑わしい」

「アサド兄様のことなら、保証します。アサド兄様には、ターミル兄様が毎夜その門から帰ってくるということは、言っています。だから、ここにもいません」

ジャミーラは辺りを見回した。

月がなければ、闇だけが二人を覆っていただろう。月を恋慕うような細かい虫の声が遠くに聞こえる。

ターミルがサーベルを鞘に納める素振りをみせることはなかった。「わかりました。この時期は誰だって、慎重になりますものね。ただ、嬉しいです。お兄様は私を女だからと馬鹿にしていないようにです。その瞬間、ジャミーラはターミルにとって懐かしい笑顔を見せた。彼女は昔、褒められると時々にかむような笑顔を見せるときがあった。それは、どうやら今も変わっていないらしい。

「馬鹿にできそうにない。兄弟の中で一番の策士家と言ってしまっても、間違っていないような気がする」

ジャミーラの懐かしい笑顔を見て、ターミルは気が和らぐのを感じた。けれど、それも彼女の計算の内なのかもしれないと思うと、寒気が走るのを感じた。彼女は見えない武器をその頭の中に持っているのだ。

「では、交渉を始めましょう。お兄様はゲームに勝つ気がありますか？」

交渉というよりインタビューだ、とターミルは思った。ジャミーラの意図が読めない。

「正直に言えば、その気はない。だが、まだ死ぬ気もない。ジャミーラこそどうなのだ？ ずっとアサド兄さんに追隨していくのか？」

ジャミーラの計画を探り出せないかと、ターミルはさりげなくそう切り替えした。

「私は勝つ気がありますよ。この国の歴史上で初の女の優勝者として。今は状況を窺っているところです」

ジャミーラははっきりとそう言った。自信を強く持って、負けなど考えていないようだった。

「お兄様は複雑なことを言っていますね。勝つ気もないけれど、負ける気もないと言うのですか？ このゲームに引き分けというのはないのですよ」

「そんなことは知っているさ。成り行きに任せるということだ」

ターミルは自分の運命を呪った。男に生まれたばかりに、この“死のゲーム”に否応なしに拘束されてしまった。女であつたら楽であつただろう、と彼は幾度思ったことか。

「では、成り行きに任せて、私に手を貸してくれませんか？ 殺しをするのではありません。情報を集めてください」

一歩前に進んで、ジャミーラはターミルを見上げた。黒い瞳は淀みなく、迷いに揺らめいてはいなかった。

ターミルは気圧され言葉に詰まったが、固まりかけた思考を溶かしてジャミーラの言葉の意味を考えた。

「それは、私にお前の支持者になれということか？」

「はい、そうです」

ジャミーラは頷いた。

「断る！ 私は誰の味方にもつかない！ できるだけこの争いから離れたい」

ターミルが強く拒絶すると、ジャミーラは下を向いてしまった。

それは今夜最初のジャミーラの弱気だった。

「私の周りには母を除いて信用できる者がいません。アサド兄様だって、いつ私を捨てるのか……。毎日必死です。私の世話係だった者にだって、助けをいつも期待できるわけではありません。なによりも……」

ジャミーラは顔を上げ、ターミルを見た。その唇は笑いと苦々しさを形作っていた。

「ハーレムは私の存在が禍だと言っています」

「ジャミーラ……」

ターミルは何も言う言葉が思い浮かばなかった。

気を許せる者が一人もないということがどんなに息苦しいことか、どれだけ心を締め付けることか。気を張り詰めて眠れぬ夜。若くありながら、年老いてしまったかのような疲労感。

活発で愛らしかった子供のころのジャミーラを今はもう窺えないのでは、という不安がターミルの思考をよぎった。

「私が王になったら、ハーレムの人たちにとっては死活問題ですものね。私はハーレムなんてもののいりませんから」

ジャミーラは鼻で笑った。

その笑いがまるで自分に向けられたものであるかのようにターミルは感じた。

彼はサーベルを鞘に納めた。

「ジャミーラ。私は誰の味方にもつかない。それは変わらないが、もし私が死んだら、お前を助けてくれないかと私の支持者たちに言っておこう」

ジャミーラは少し開いた口を閉させなかった。

「あと少し、少なくとも赤い月が出る夜までは待つてほしい。それまでは死ねないから。それが過ぎたら、私は死ぬかもしれない。もしたら、私の支持者たちは、お前のところへ向かうだろう」

ターミルは片手をジャミーラの肩に置き、月の光に照らされた彼女の顔をよく窺った。

すっかり大人になった彼女は、無邪気な笑顔ではなく、世の中の影を知った複雑な表情だった。鉄の仮面で繊細な部分を覆い隠しながら、仮面から覗く二つの目だけは脆さを宿していた。だが同時に大いなる野望を夢見ていた。

「そんなことを言わないでください！ 死ぬだなんて」

ジャミーラは震える唇でそう言った。

「王冠をその頭に輝かせるのを願うよ、ジャミーラ」

ジャミーラの肩を叩いて、ターミルは笑顔で彼女の前を去っていった。

ターミルが去ってしまうと、ジャミーラは木の根元に腰を下ろした。

彼女はため息をついた。

彼女は交渉の結果に満足していなかった。結局ターミルを味方につけることができなかったのだ。

それでも、少しは事が自分に有利な方向に動いたことに、思わず笑みが零れた。

冷ややかな風を受けながら回廊を歩いていたターミルは、不意に立ち止まった。彼はジャミーラの罠にはまってしまったことに気が付いた。彼はまったく彼女に同情してしまっていたのだ。それを彼女は計算していたに違いない。ただ全てが彼女の思い通りにいったとは思えなかったが。

ターミルは歩き出した。

罠にはまったことに気が付いても、ジャミーラの言っていたこと

は真実だろうと彼は思った。一人の孤独、心労。だが、彼は、彼女の心の強さについて思い違いをしたことを悟った。二つの目が脆さを宿していたなど、勝手な思い込みだった。月光の演出に違いない。彼女の瞳が宿していたものは、覇者のみが持つ大志ではなかったか。そして、やはり彼もジャミールを女だからと甘く見ていたのだ。

第五章 魔法

第五章 魔法

ターミルは腕に走った痛みで顔を歪めた。左の二の腕からどくどく、という音がする。

二の腕にぱっくり切り傷が開いていた。

今夜もまた夜の祭りへ向かっていた時、ターミルの予期しないことが起こった。

こっそりと家を抜け出てきたつもりだったが、後を付けられていたのだろうか。繁華街を抜けた人通りのない路地で彼は襲われた。三人の男だっただろう。顔は目以外を覆っていてあまりわからなかったが、その内の一人はその体格、声から、以前にも彼を襲ったことがある男ではないかと思われた。二番目の兄であるアサドが金を払って雇った裏社会の殺し屋に違いない。死闘の生活の中で身についた剣術で逃げきれ、二の腕の傷だけですんだということは幸이었다。三人の、しかもプロの殺し屋かもしれない男に襲われながらも、人生を通して得た剣術はなかなかのものだったらしい。

人通りのない狭い路地に彼は座り込んでいた。痛みはだんだん麻痺し、血も治まり始めていた。彼はスカーフを取って、それを傷口に巻いた。

痛みも麻痺してきたことだし、彼は祭りに行けるだろうと思い、立ち上がった。

音楽というものは、それがなくても人は生きていけるが、それがあれば人は夢を見て心の傷を癒す。そしていつしか、薬がなければ身体の傷がもとで命を落としてしまうことがあるように、音楽がなければ心の傷がもとで病に伏すことがあるのかもしれない。耳が不

自由な者も楽器とは縁遠い者も、やはりその心には音楽が流れている。風が肌を撫でていく感触も音になり、星がきらめく様子も音になる。鼓動が指揮者となり、人は体内で音楽を育む。指揮者が指揮台を降りたとき、人は演奏会に幕を下ろす。

演奏会の間には幾つもの自分の音楽とは違う音楽に出会い、そして時には混ざり合い、時には拒絶しあう。そして、時には自分の音楽を続けていくのに不可欠な音楽と出会うのだ。

ターミルの、憂愁の昼、の音楽は終わりを向かえ、次の曲、至高の夜、の準備が始まった。次の曲は速い曲だ。

ターミルの目にいつもの森が写った。それが合図、指揮者はタクトを振り始めた。曲は小さく始まった。序所にそのテンポは速くなっていく。彼の音楽は期待を膨らませていき、途中から外の音楽も混ざり始めた。太鼓の音、笛の音、人の声。音楽は混ざり合い、早くも最初の盛り上がりへのパートへ入った。

「ノルハディヤ！」

ターミルはいつものベンチで二人分のグラスに酒を注いで待っているノルハディヤの元へ駆けていった。

「ターミル！ 今日には来ないと思ったわ。遅かったのね」
駆けてきたターミルにノルハディヤは抱きついて彼の頬にキスをした。

ターミルはノルハディヤを抱きしめ返して、その髪に鼻をうずめた。

「すまない。少しトラブルがあつて。でも、ここに来られたんだ！」

「トラブルってどうしたのです？」

「ほんのちょっとしたことです。大丈夫！」

ターミルはぎゅっとノルハディヤを抱いて彼女の頬にキスを落とした。

「あっ！！」

ノルハディヤが小さな悲鳴を上げた。

「どうしました」

ターミルはノルハディヤを離すと、彼女の顔を覗き込んだ。

「もしかして、怪我をしたのですか？ ああ、私に見せてくだらない？」

ノルハディヤはターミルの返事も聞かずに彼をベンチに座らせると、彼の腕に巻かれていたスカーフを取った。

「酷いわ。どうしてこんなことに」

「ちょっとした引っかかり傷です」

ターミルはノルハディヤの手からスカーフを抜き取ると、また傷口に巻き始めた。だが、すぐにノルハディヤが止めた。

「私に任せて」

彼女はスカーフを取り除くと、何か小さく囁き始めた。歌のようであり、儀式の文句のようであった。いずれにせよ、ターミルには分からない言葉。言葉が連なっていくにつれて、何かがターミルの体の中に沸いてくるようであった。温かい力のようなもので、それは腕の傷に特に集中しているようだった。その温かいものはやがて光を帯びて彼の傷をすっぽりと覆ってしまった。

ノルハディヤの静かな歌が終わった。

傷口を覆っていた光が消え失せ、現れたそこには傷などなかった。

「ノルハディヤ？」

ターミルは呆然として、ノルハディヤを見た。

「何？ これで、痛みなんて気にせずに今夜も楽しめますね」

ノルハディヤは酒の入ったグラスをターミルに握らせた。

「あなたは、何者ですか？」

ターミルは瞬きもできなかった。思考の奥に押し込められていた疑問が一斉に飛び出てきた。なぜこの時期に祭りをやっているか？ 赤い月とは何か？ なぜ馬は彼の家を知っている？ お酒はなぜ尽きることがない？ それに、なぜ若者しかいないのか？ それも子供ではなく年頃の男女しかいないのだろうか？

あまり重要だと思っていなかった疑問が、今になって重要なことなのではないかとターミルには思えてきた。

「私は……あなたに恋する愚かな月。夜にしか会えないこの身を呪いながらも、あなたに会いたくて、死ぬこともできない。夜のみの逢瀬を心待ちにし、あなたにあった時の鼓動の音楽に恋焦がれる」
ノルハディヤは、ターミルの両目に映る自分の像を確かめる。
「私입니다。あなたに会った時の鼓動の音楽が愛おしい」
ターミルは、ノルハディヤの両目に写る自分の像を確かめる。
そのまま、二人は唇を重ねて、互いの温もりを確かめた。

白亜の壁の“牢獄の中”、ジャミーラはターミルの部屋の前に来ていた。部屋の主がいないのは知っている。ターミルは夜中に出かけているのだから。

彼女は部屋に入る前に、扉を守る二人の護衛と対峙しなければならなかった。

「こんな夜中に何の用でしょう？ ジャミーラ様」

護衛の一人が無表情にジャミーラを見下ろしてきた。

「こんな夜中だからこそ、用があります。あなた方にお話したいことがあるのです」

「我々は今、警備中でありませう。用ならまたいづれ」
もう一人の護衛がずいっ、と一歩前に出た。体格差でジャミーラを圧倒するかのよう。

「私にはあなた方が何を警備しているのか解りかねますわ。まあ、私には重要なことでないので、いいんですけど」

ジャミーラは二人の護衛を交互に見遣り、それから、くるっ、と背を向けた。

「それは……どういふことでしょうか？！」

護衛は顔を見合わせた。お互い思い当たる節がある。

ジャミーラは再び、護衛の方へ体を向けた。

「どういふことって、部屋の中を覗いてみれば解ると思いますわ」
ジャミーラは片眉をあげてみせた。途端、一人の護衛が壁の蜀台

を取り、もう一人が扉を勢い良く開け、二人は部屋のベッドへ駆け寄った。

「まだだ。ターミル様はまた出て行かれたようだ」

一人の護衛が毒づいた。

「ジャミーラ様。あなたはこのことをご存知だったのですね？」

蜀台を持った護衛が部屋の外に立ったままのジャミーラへ歩み寄っていった。

「ええ。そのことについての用なんですけど、警備中ですが、またいづれの時に」

ジャミーラは、失礼、とドレスの裾を揺らして背を向け、廊下を歩いていこうとした。

「お待ちください。その御用を話してくださいませんか？」

もう一人の護衛がジャミーラを引きとめ、頭を低くして、彼女を部屋に迎え入れた。

ジャミーラは部屋に入り、護衛に導かれ、ソファアに腰掛ける。一人の護衛は部屋に明かりをつけ、もう一人の護衛はバルコニーの二人の見張り番に声をかけた。

「大切な話があります。ターミル様がまた出かけられたようです」

ターミルは空を見上げた。そこには輝く満月。星の絨毯を背景に、それは瞭然と黄金に輝いている。

「ノルハディヤ。赤い月が出るのはまだまだ先のことですよね？」

ターミルとノルハディヤは踊りの輪に加わりうと、ちょうど立ち上がったところだった。ところが、ターミルは足を止めて、ノルハディヤの袖を引いたのだ。

「赤い月が出るのは明日の晩です。それはそれは美しい月です。私は赤い月を見るのが大好き」

ノルハディヤは振り返り、ターミルの頬に手を当てた。若く張りのある頬に。ノルハディヤはしばし、彼の美しい顔に見惚れた。

「でも、赤い月が昇れば、この祭りは終わってしまうとあなたは言

った！ 明日で終わってしまうなんて」

ターミルはノルハディヤを引き寄せ、抱きしめた。

「あなたとは離れたくありません」

「離れませんか、ターミル。明日の赤い月の晩、私たちは一つになるのです。私とあなたは共に生き続けるのです」

ノルハディヤがターミルの腕の中で顔をあげた。彼女はターミルの空色の瞳をじっと見つめた。その奥にある心の扉を見つめる。

「明日、必ず来てくださいね」

ノルハディヤはターミルの心が逃げないのを確信した。扉の奥にすっかり入り込み、そこに自分の存在を根付かせる。

「もちろんあなたに会いに来ます。そして、共に生き続けましょう」

金色に光ったノルハディヤの瞳を見て、ターミルは一層彼女を愛おしいと思った。彼女に身を捧げるのが最も幸福なことであり、自分の命は彼女のためのものであるのだと思い込むようになった。

第六章 駆け引き

ジャミーラの話を聞いた護衛たちは一様に眉を顰めた。

「この時期に祭りは禁止されています。それなのに、なぜ祭りが開催され、そこにターミル様が足を運んでいるのです？」

壁に掛けられた蝋燭とテーブルの上の蝋燭に火が灯されていた。そこに浮かぶのは五つの顔。四人の護衛と一人の美しき姫である。口を開いたのは、その5人の中、ソファにふかぶかと腰掛けたジャミーラに向かい合わせに座った護衛隊チーフである。蝋燭の光に照らされる中、その切れ長の目が細められた。

「そんなこと私に分かると思いますか？ 祭りのことはともかく、ターミル兄様が足を運んでいる理由を知らないあなたたちは、本当にお兄様の護衛なの？」

ジャミーラの小さく嘲笑う顔が明かりの中に浮かび上がった。

「確かに、これは我々の不手際です。チーフ」

立って聞いていた護衛の一人が言った。護衛隊チーフは肩を落とす。

「でも、お兄様が足を運ぶ理由は分かりますわ。女性です。それも、飛び切り美人」

男は分かりやすい、と言ってジャミーラはソファの背にもたれた。

「こんな時期に！」

護衛隊チーフの横に座っていた男が声を荒げた。

「こんな時期だからこそです。死の蔓延した生活から逃げ出したいと思うのは人間の心」

髪をかきあげてジャミーラは言う。

「ところで、ジャミーラ様はなぜそのようなことを知っているのです？ それに、なぜ我々に知らせてくださったのでしょうか？ ターミル様はあなた様の敵のはず」

チーフは膝の上で手を組み、明かりに照らされるジャミーラの表情を注意深く窺った。ターミルの敵なのだ。裏があるに違いない。

「ターミル兄様の後を付けました。残る兄弟でアサド兄様を攻略できるのはターミル兄様だけと考えています。なので、あなたたちにはターミル兄様をこのゲームへ連れ戻してもらわないとなりません」

ジャミーラはさすがにひどく女王然として足を組んだ。その尊大な態度はいつそ賞賛を得るほど毅然としていた。女性でありながら死のゲームへの参加を表明しただけのことはある。だが、賞賛の前に護衛たちは首を傾げた。

「待ってください。あなたはアサド様と組んでいるはず。ところが、あなたの物言いはまるでターミル様と手を組み、アサド様を裏切るような言い方ですね」と、護衛隊チーフ。

「アサド兄様と組んでいるですって？ “組む” というような対等な立場ではありません。私は猫です」

護衛たちは息を呑んだ。目の前にいるジャミーラはアサドに泣いて命乞いをし、もっぱらアサドの意のままだという噂だ。ところが、本当のところは全て計算づくされたものなのかもしれない。猫の皮の下は狐といったところか。

ジャミーラは長い睫毛に縁取られた目を狐のように細めた。

「アサド兄様が冠を頭に乘せれば、この国は破滅です。外の国の領土にしか目を向けないあの人はこの国の脅威です。けれど、このままではあの人がこの“ゲーム”に勝利するのは目に見えています。策が必要なのです」

「では、お聞きますが、ターミル様の毎夜の家出をアサド様はご存知でしょうか？」

護衛隊チーフが尋ねる。彼の額に汗が輝いた。

「いいえ。私の知らないところで情報を入手していれば別ですが、その様子はまったくありません。夜は、あの頭の中はベッドの楽しみばかり」

ふふ、とジャミーラは笑った。全てを知っているような超越した

笑みであつた。男は分かりやすい、とまた呟きが聞こえてきそうな笑みだった。

「ということは……失礼ですが……今、アサド様はどうしていらっしやるのです？」

護衛隊チーフの隣に座っていた面長の護衛が言う。

「寢酒を楽しんで寢入ってしまいました」

「ですが！」

護衛隊チーフがすぐに反論する。

「寢酒だけで寢入ってしまうような方ではない！」

けれど、ここでジャミールは余裕を見せた。足を組み換え、正面から護衛隊チーフの目を見据えた。

「少し工夫をすれば、だれでも眠ってしまいますよ」

彼女は立ち上がって、分厚いカーテンが閉められた窓へ向かった。

「夜の町に出かければ、工夫の仕方は幾通りもみつかります」

「薬を仕込んだのですね？」

護衛隊チーフがジャミールの背に声をかけた。

「そうよ、簡単なことでしょ？」

ジャミールは腕を組んで、護衛隊チーフを振り返った。

「それで、わが陣営にあなたと組めというのですか？」

護衛隊チーフも立ち上がり、ジャミールの前に壁をつくった。

「アサド兄様を止められるのはあなた方だけなので、そのために情報を流そうと申し出ているのです」

ジャミールは再びチーフに背を向け、カーテンに手をかけて、ゆっくりと開いた。

「そんな話、我々が信じるとお思いですか？ それに、もしあなたが情報を漏らしているとアサド様が知ったら、あなたの身も危険ではないのですか？」

「確かに、その心配は否めませんが、男を操るのは簡単です」

彼女はカーテンが開いたバルコニーへ歩み出た。月が明かりをバルコニーに落としている。そこに足を踏み入れた彼女は、薄いネグ

リジエを着ているのみ。ネグリジエは月光を通し、その光の中でジャミーラは妖艶なシルエツトを誇っていた。もはや、笑顔を振りまいていた可憐な少女の面影はない。

護衛たちはみな男。思わず目を見張った。バルコニーに現れたその像は、伝説の人食い族の美女を思い起こさせた。その美女たちは月の輝く夜に薄布を着て、もしくは裸で、この世のものとは思えない美しい声で歌を歌い、男を誘って食ってしまうという。

「みなさん、こちらに来てください」

ジャミーラは部屋の中を覗き、護衛たちを呼んだ。

四人の護衛はしぶしぶバルコニーに出てきて、チーフがジャミーラの横に並んだ。

「あの西の方角に見える森。ぼんやりと赤く光っていますでしょ？あそこで、祭りが行われています」

ジャミーラは右手で遠くを指し示した。その先にはほんのり赤く輝いている一体がある。真夜中であるから、明かりはほとんど点いていない。だからこそ、その赤が目立った。そこが例の祭りが行われている場所だった。

「あの町外れの森ですね？　でも、なぜあんな森で？！」

チーフは顎を撫でた。

「一度踏み込めば二度と戻れない。そんな怪談話が絶えず、国民はあの森に近づこうとしない。それなのに、祭りが行われていると言うのですか？」

ジャミーラより背の低い、童顔の護衛が言った。

「ええ、私はそこまで見に行きました。ですが、祭りというより、儀式かもしれません」

「儀式、と言いますと？」

チーフが尋ねる。

「なんとなくの勘です。なんだか、人間でないものと交わるためのもののような。はっきりと理由は言えませんが、恐ろしい何かが起こりそうな気がします」

ジャミールは一步、二歩、と静かにさがり、部屋の中へ戻っていた。少しでもあの森から遠ざかりたいとでも言うかのようだ。彼女ははっきりとこう言った。「それでも楽しそうな祭りです」「ジャミール様。あなたの話が嘘であれ本当であれ、明日にはあの森を訪れてみることにします。その後、我が陣営があなたとどのような関係を持っていくか結論を出すことにしましょう」

ジャミールの後にしたが、護衛隊チーフも部屋の中へ入ってきた。

「分かりました。良い結論が出たなら、祝い酒でも持ってきました。お兄様は現実から逃避したいらしいから」

ジャミールはベッドサイドテーブルに置かれた一冊の本を手にとった。それは神々と怪物たちの伝説・伝承が収められた本だ。

「お酒を飲んで、一時でも嫌なことは全て忘れてくれるといいですわ」

彼女はしおりがはさまれたページを開いた。ちょうど新しい章が始まるページで、題名は「シュドラの宴」というものだった。

「本といたら、現実的な本を読んで、神話・伝説といったものは読まなかったものを、最近になってそういったものを読み出したのです。気を張り詰めて、お疲れになっているのでしょうか」

ジャミールの横に並び、護衛隊チーフがこぼした。

「でも、こういった本だって素晴らしいアイデアを提供してくれませう。例えば、シュドラは美しい女性の姿で宴を開き、そこに迷い込んできた男を心行くまで楽しませて、男がすっかり気を許したところで食べてしまう、という怪物。ならばこれを手本に、ターミル兄様が行動を起こすまで、私は美女を集めてアサド兄様を喜ばせ、兄様の警戒心を緩めておきましょう。そうすれば、事も運びやすい、というものです」

ジャミールは本を閉じて、サイドテーブルに戻した。

「あなたを敵に回したくありませんね」

感心したように護衛隊チーフが言った。

「では、これで私は」

ジャミーラは僅かに頭を下げ、扉へ向かった。その背に、護衛隊チーフが幾ばくかの憂えを込めて、声をかけた。

「くれぐれもお気をつけ下さい。ターミル様があなたの身を案じていました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3529a/>

夜の祭りと赤い月

2011年1月18日03時34分発行